

名古屋市次期総合計画有識者懇談会分科会（8月28日 福祉・子育て・教育・医療）会議概要

- 公共施設の老朽化に伴う建て替えについては、中のソフトも、統合等によってその大事なソフトが散逸しないように対策する必要があるのではないか。
- 名古屋市の施設の問題として出てくるのが、どこの区でも同じように施設を作らなければいけないといったことであるが、同じようなものを16個作ってもあまり意味がないので、隣り合った区では大きいものを1つ建てるとか、特定の分野に特化していくといったことも考えると良いのではないか。
- 男女平等参画や人権には有事の際の問題がある。もしもの時にも人権を保障することを意識できると良い。それがまさに女性が社会で活躍できるまちづくりにつながっていくのではないか。
- 待機児童は確かに減ってきているものの、3歳未満までは非常に厳しい。早急に解決できると良いが、希望した保育所に入れるところまで整理が進むとより良い暮らしができるようになるのではないか。
- トワイライトスクールなどがより子どもたちの育ちの場としてふさわしいような場になるよう、尽力していただきたい。
- 市民目線での行政では、弱者の目線も大事にしなければいけないが、誰にでも良いというのは、誰に対しても中途半端なのではないか。市民も多様になっている。
- 高齢者が増えてきて、単身で孤独に暮らしているということがある。病気になった時に医療費がかさみ、若い世代の人口が減ってくる中、高齢者医療費が増えていくという悪循環が予想される。最近のトレンドとして、できるだけ病院ではなく在宅で治療するという方向性があり、鳴子団地では「なごやかモデル」が始められている。
- 高齢者の病気というものは非常に特殊で、老年医学という形で高齢者の疾患をひとつのものとして捉えて治療していくことが必要となってくる。老年医学の専門家を育てる施策も必要ではないか。
- 少子化に関連して、産科医療の充実が大きな問題になっているが、人材が少なく、育成に時間が掛かっている。名古屋市も産科医療が充実するような支援をしていただきたい。結婚年齢の高齢化にはリスクを伴うので、障害者医療も考えなければならない。愛知県の障害者医療には不足がみられるので対策が必要になってくる。
- 救急問題については、たらい回しも全国的にみると少ないが、3次救急が少なく、安易に救急車を使っている人が多い。トリアージの体制も必要ではないか。
- 名古屋市のひとつの特徴である西部医療センターの陽子線治療を充実させて、名古屋近隣、あるいは東京からも患者を呼べるようにしたら良いのではないか。東京近郊からも患者が来れば、むしろリニアによってこちらの都市圏が活性化するということにもなるのではないか。

- 民間の大きな病院は西南部に多く、津波や液状化現象で機能しない可能性がある。災害時に大病院として機能すると考えられる数少ない病院がどのように連携して対応するのかを考えなくてはならない。現在、名古屋大学を中心にカルテの統一化が進行しているが、全体として統一した医療ができるような体制作りをしていただきたい。
- 愛知県はものづくり産業が非常に盛んな地域であるが、自家用車は飽和状態で、国内でこれ以上成長する状況ではないだろう。介護ロボットはそのうち自動車に替わる産業となると思うので、先駆けてものづくり産業中心に体制を作っていければ、リニアができて東京圏から人が集まるとも考えられるのではないかな。
- 教育に関する項目が少ない。戦略の「子育て世代に選ばれるまちをつくる」にも関係するが、名古屋市の教育の特色が見えない。15年後を見据えて、今の子どもたちがどういう青年、大人になってほしいかというビジョンを持ち、そのための喫緊の5年間の方針が出ると良いのではないかな。
- 大人の社会教育や生涯学習について、民間や市民に活躍してもらうような方向性は良いが、行政としてやらなければならないところには、予算を立て、専門職を置くなりして、行政がやるべき生涯学習、社会教育の重点としてはっきりさせていきたい。
- 生涯学習センターに指定管理者制度を導入しているが、生涯学習の価値をどう認識しているのか。名古屋市として社会教育をどうしていくかの方針を打ち出していきたい。
- グローバル化では、このまちの中で暮らしている外国人が暮らしやすい、あるいは社会に積極的に参加できるような仕組みをもっと作ってほしい。グローバル化や誰もが住みやすいまちとするのなら、外国人市民についても方針を示すべきではないかな。
- 名古屋市の中でも、日本語が不十分で学校の勉強についていけない、あるいは、高校に進学できない子どもがたくさんいる。外国人の子どもも含めた視点を持ていただきたい。
- 都市像の「誰もが生き生きと過ごせるまち」という言い方が、何も言っていないに等しいというような印象を受けた。特に、人権という言葉が少し軽いのではないかな。もう少し重点を置き、人権を守りますという形で示した方が印象が良い。
- 全部行政ではやりきれないので、公的サービスを民間に移行していく状況だろうが、人材の育成の面では、一般行政職の職員だけではなく、専門職を適正に育てて配置していくことが重要になる。
- 学校に外国人に教える専門の先生がいらない。これから15年先を見据えると、学校現場の中に日本語ができない子どもが増えてくるので、対症的な対応ではなく根本的な制度構築が必要である。その時にできる限り正規の職員として任用してほしい。
- 情報発信については、「広報なごや」は情報が分かりづらいので、もっと面白く読みやすい広報にしていきたい。名古屋市はいろいろと面白いことをしているのに、

後から分かることが多い。

- 「都市間競争に勝ち残れる、大きく強い名古屋をつくる」という戦略と、いかに人にやさしいまちづくりが連動していくか、いかに融合させていけるか。戦略がいかに福祉的に推進されるかというところが重要である。
- 社会福祉では、バルネラブル（弱さを抱えている人々）に焦点が当たっている。強い名古屋を支えるために、弱さを持った人に対していかに自立への道をつけていけるかという視点では、重点課題に経済活力の低下とあるが、高齢者が増えることよりもそういった人が増えていくことの方が危惧されるのではないか。
- 大都市としての魅力を出していこうというのは良く分かるが、名古屋に住みたいと思わせるような地域政策が必要ではないか。地域ごとに生活機能を弱化させずにさらに強化できるが課題である。
- 日本語を教える時に、初級の日本語が分からない子どもには、最初は母国語でのフォローが必要である。学校と親の間で通訳をしていることもあるので、専門職にするならば、きちんとした制度を構築していただきたい。こちらの大学で教員免許を取った外国出身の人が、正規の教員として日本の学校現場で増えていくと良い。
- 地域福祉の視点からは、市民と行政との協働が大切である。行政が住民といかにうまく協働をしていくかが、一人ひとりの困りごとに関わる重要なことである。
- 今、地域で活動しているのは主に中高年だが、15年先を見据えて、今名古屋を支えてくれている方の後継ぎを育てていく仕組みが必要である。
- 地域での活動となってきた時に、今までの暮らし方を前提とすると、うまくいかないし、ジェンダーの視点からも、地域活動と仕事の両立は難しい。そういうところを配慮したうえで、地域での取り組みを市としてサポートしていくと良いのではないか。
- 鳴子モデルの優れた点は、双方向にメリットがあることである。住んでいる高齢者の生活支援や在宅医療支援がメニューになるが、大学側にとっては人材の育成ができるということがメリットである。教育機関としては、こういう場を作ることは難しい。
- いかに早く発見できるか、いかに予防のレベルで終わるのかということになると、すごく困っていないけど駄目になりそうな人を地域で発見するための、専門職が必要なのかもしれないし、地域に行って拾って歩くような職員を置くことも方策になるかもしれない。
- トワイライトスクールを子どもたちの生活の場や育ちの場にしていく必要がある。トワイライトスクールがほとんど学校の延長になってしまっているのも、何らかの視覚的なことも含めて、区切りをつけるというようなことがあった方が良いのではないか。
- 民間には、学童とは別のものができており、サービス・カリキュラムは良いようだが価格が高い。たくさんの選択肢のうちのひとつではあるが、経済的な事情でトワイライトスクールしか選べない人もいるので、むしろトワイライトスクールの方が魅力が

あるという形になると良い。

- 最先端医療機器を利用した産業活性化の可能性は高い。日本で使っている高額な医療機器のほとんどが諸外国で作られているので、日本発で日本人の体に合ったものを作っていく可能性があるのではないか。この地域は特に精密機器の製作については日本一なので、医工連携・薬工連携ができると産業活性化につながるのではないか。